

神奈川県海外技術研修員として来日した皆さんが集まって懇親会を開くので、参加しないかと誘われ、約10日間の日程でエクアドルの首都キト市を訪ねたので、現地で得られた情報などを以下に紹介する。

1. エクアドル共和国の概要

南米の赤道直下に位置し、北隣りにコロンビア、東隣にペルーがある。国内はシエラ(中央アンデス地方)、オリエンテ(東部熱帯低地)、コスタ(海岸地方)およびガラパゴス諸島の4つの気候風土の異なる地域からなり、人口は約1380万人で、古代にはインカ帝国の北端にある第2の首都として栄えたが、1532年から約300年間スペインの植民地となり、金・銀を多く産出し、1830年に大コロンビアからの独立をはたした。人種構成は原住民とスペインの混血:60%、原住民:30%、ヨーロッパ系の白人:5%などとなり、宗教は90%がカトリックである。

2. 技術研修員OB/OGとの懇談会参加

神奈川県海外技術研修員として来日した若者達とその日本への派遣をサポートした人達が8月19日にヒルトンホテル会議室に集まり、懇親会が開かれた。JECKの評議員であり、日本の製薬会社で市場開発部門のリーダーとして活躍しているフレディ・アルミホス氏の司会で始められ、私から県の制度の概略とこれまでの経緯、JECKがこれまで行ってきた支援活動の内容などを紹介した。またエクアドル側で積極的に支援活動を進めてこられた、元国立エスタド銀行・開発部長のMr. J.マルセロがこれまでの技術研修活動の成果と今後の交流について熱く語られ、各参加者もそれぞれの思いを語った。参加者はアマゾンの上流地域の病院に勤務している、Dr.ヴィヴィアナとヨーロッパの大学で修士課程を終えて帰国し母親とバカンスに出掛けていたMs.カティア・ペレス以外の研修員OB/OG全員の他、元日本公使のMr.S.マルセロ、カトリカ大学と学外団体との協同プロジェクトのコーディネータ、Mr.エディ、FINEの理事長のMs.ヨランダなどが多彩な顔ぶれが参加して、今後の継続的な交流をどう進めていけば良いか、などについて話し合った。



技術研修員OB/OGとの懇談会

3. カトリカ大学訪問

カトリカ大学はキト市内を南北にはしるドセ・デ・オクトブレ通りであり、設立当初はビジネススクールとして1946年に発足した。工学部では土木工学科とITエンジニアリング学科に力を入れており、教室、試験室などの施設を見学、工学部のITエンジニアリング学科の主任教授、日本語講座を担当している日本人講師になどにご挨拶することができた。構内は良く整備されており、美しい植栽に囲まれた芝生の上で学生達が昼休みを楽しんでいる光景が印象的であった。



カトリカ大学

4. 障害者介護施設、FINE訪問

Ms.ヨランダ・オリティズが理事長を務めるFINEはキト郊外の丘陵地帯にある。花木と畑に囲まれた広い敷地には幾つかの建物に別れて施設があった。熱心に絵画の制作に取り組んでいる障害児、独自に開発したソフトを使って自分の思いをパソコンに入力しているもの、細かい手作りの“みやげ”を作っているグループ、外販用のパンの工房などを見学した。その建物の1つはJICAが寄付したもので、青年海外協力隊の若い女性が活動しており日本の支援に感謝する言葉が富士山の絵を添えて建物の外壁に描かれていた。



障害者介護施設、“FINE”

5. 市内観光

キトは標高4839mのピチンチャ山を背景に南北17kmの細長い谷沿いの街である。ユネスコの世界文化遺産に1978年に登録された旧市街(セントロ)を訪ね、サン・フランシスコ教会と付属の美術館、カテドラル、独立記念塔などを見学した。またノルテと呼ばれている新市街では近代的なデパートや大学、大使館などを見学した。近年郊外に国際空港が建設され、トロリーバスが走り、スペインの支援による地下鉄工事も今、着手したとのことでコリア大統領の強力なリーダーシップによって街の近代化が急速に進められている。

6. 日本のプレゼンス

JICAキト事務所、日本大使館への訪問。キトに在住しているJICA専門家やシニア海外ボランティアとの懇談などによって、現地における日本のプレゼンスを探って見た。日本とエクアドルとの間に外交関係が樹立されたのは1918年。この年に野口英世が流行していた黄熱病対策のためにエクアドルに滞在して活躍し、その功績を称えた銅像がキトとグアヤキルに建られ、その名前を冠した小学校が今も現存すると言われるが、一般には殆ど知られていない。

エクアドル在留日本人の数は2010年の統計でみると、永住者、長期滞在者合わせて429人で余り多くはない。日系企業は17社(JETRO調査)、日産車のタクシーが走り、日野のバスとトラックのシェアが高い。コマツの建機組立工場があり、業務用冷凍機メーカーも進出しているが、移民としてエクアドルに渡り、バナナの近代的な生産に成功した田辺農場ほどには知られていない。一方携帯電話で独占的なシェアを誇る、サムソンの韓国や水力発電所の大規模建設で貢献している中国のプレゼンスが急速に高まっており、大学の中国語講座の受講生も急増しているとのことであった。

一方、現在エクアドルで国際協力・支援活動に従事しているJICAの関係者は総員40数名で主に介護、医療、教育などの分野で地道な活動を続けており、親日家も着実に増加している。日本大使館でも国交樹立100年を迎える2018年に向けて、何か良い企画を……と検討を進めているとのことであった。

7. 総合所見

エクアドルは人口は余り多い国ではないが、教育制度も充実しており、勤勉で優れた人材が育っており、地道に近代化に取り組んでいる国であり、JECKが今後も支援を行うのに相応しい国だと感じた。

なお、ガラパゴス諸島のサンタクルス島を訪れ、“ゾウガメ”と“イグアナ”に会い、環境汚染問題についていろいろ考えてみた。その内容は別の機会に報告したい。